

書名：鷗外全集 第十九卷 於母影
頁碼：60~63
作者：森鷗外
出版者：岩波書店 (東京)
出版時間：1972

禍福任來去
往事歸一夢

與君永相思
茫々不可追

鷗外全集 第十九卷
於母影

青邱子

青邱が身はいやゝせに 瘦せにたれども其昔
五雲閣下にすまひけむ清き姿ぞしのばるゝ。
いつか此世におりぬらむ。しが名つけぬも哀なり。
草枕たびねせず、鋤とりてたがへさず。
さびにさびたり劍太刀、亂れまさりぬ文の卷。
五斗米ほしと腰を折らめや、城降さむと舌掉はめや。
朝夕歌ふから歌に 歌ひふけりて、小山田の
水田の畔に杖曳くを、魯の迂儒楚の狂生と、
口々にいひあへりけり。
心をおかぬ青邱は、うたふ絶間ぞなかりける。
きのふは飢を打わすれけふはうさをや晴すらむ。
歌ひほれ酔にたる 時しきたれば蓬なす

髪のみだれも解かばこそ。我子啼けども慰めず、
まらうと呼べどいらへせず。」

顔回のまづしきも、猗頓氏の富みたるも、
うれへねばこそ戀ひもせね。」

恥づかしとせず、やれ衣を。妬ましとせず、かゞふりを。

烏兎奔れども、われ追はず。龍虎搏てども、顧ず。」

岸邊にひとりたゞみつ、木の間を獨さまよひつ、

其源をきはむれば、造化萬物のこりなく

われに眞心あかすなり。冥茫たるやすみまで、

際なく心通はして、目に見えぬ物の聲きゝつ。」

懸蟲のかすかなる、つらぬかでやは、吾征箭。

長鯨のいとたけき、とりひしぎてむ、我力。」

きよき哉、沆瀣の氣。けはしさよ、崢嶸の道。

村雲拂ふあさひ影、露霜しのぐ野邊の草。」

雲のかけはし登りては、月窟に入り、

犀のともしび照らしては、牛渚を見る。」

おに神に心かよはせ、山水と姿あらそふ。

光そふるは、天つみ空の星のはやしか。

いろ助くるは、をざゝが原におく白露か。

水莖のあとにほやかに、落せば玉の聲すなり。」

流に近き、あしのやのこやの簷端に雨晴れて、

松吹く風も絶えにけり。」

風戸の下に、うたゝねの晝寝しはてゝ、歌よみぬ。

いで壺をたゞきて歌ひてむ。

浮世の耳をおどろかす聲にあはせて、君山の

翁が笛を、おもしろく、月澄むよはに吹かせばや。」

しかはあれども、忽に波起り、山崩れ、

鳥叫び、獸啼き、これに驚く天つかみ、

われを此世にあらせじと、白鶴の背にかきのせて、

月のみやこへ還さばいかに。